

## 江戸時代、静岡県における蘭方医学の普及、 特にその学統について

津田進三

江戸時代の静岡県は駿河、遠江、伊豆の国々に分かれ、幕府の天領、旗本の知行地と大名たちの封地とがあつてかなり複雑な支配をうけていた。大名領には駿河に沼津、田中（現、藤枝市）（以下同じ）、小島（清水市）の三藩があり、遠江には浜松、掛川、横須賀（小笠郡）、相良（榛原郡）の各藩があつたが、いずれも数万石の小藩であり、しかも移封がはげしくて独自の文化を育てるには至らなかつたようである。従つて尾張における名古屋や、加賀の金沢のような城下町を中心とした医学を考えることはかなり困難であり、それに代つてある程度機能したものが東海道の宿場町であろうと思われる。

東には政治の中心地の江戸があり、西に文化の中心の京都があつて、この二つの中心地を結んだのが東海道であつた。五十三次ある宿場のうち、静岡県には十一番の三島から三十二番の白須賀まで二十二駅が置かれていた。徳川政権が安定し、交通路が整備されてくると、参勤交代の大名たちをはじめ東海道の交通量は飛躍的に増加し、東西の文化もまた東海道を通じて上下した。名のある医師達が通行し、急病人には参勤交代に随行する藩医も町医たちと協力した。儒者や国学者は勿論のこと、和歌、俳句、狂歌や絵画などの文化人と町医との交流もまた頗る広範であつた。静岡県の医学史を考へる上で東海道の存在は重要なものがあつた、といえるようである。

平賀源内は伊豆の鎮惣七の助言で芒消を得た喜びを『物類品隲』<sup>(二)</sup>に特記しており、その結果宝曆十一年(一七六一)幕命により伊豆を調査したが、このとき鎮惣七が三島で並河誠所に儒を学び、常に救急の用のため本草の知識を教えられていたことを知り、「嗟乎君子教人 其所及者遠矣哉」と並河誠所を激賞している。並河誠所は古医方の大家並河天民の兄である。また平賀源内に洋画の手法を学んだ司馬江漢は天明八年(一七八八)東海道を長崎にむかい『江漢西遊日記』をのこしたが、彼は次々と土地の有力者を訪ねて新しい西洋画を示しており、府中(静岡市)では駿府城附医師の塩谷桃庵などと親しく交遊している。<sup>(三)</sup>

蘭方医学は新しい学問であった。朱子学的な觀念による李朱医学を不満として、親試実験を主張する古医方が現われ、その流れの中から成立した蘭方医学の実証精神は、近代科学への道を開くものであった。その蘭方医学を学ぶために人々は遠く長崎へ、また京都へ、江戸へと遊学し、勉学修業をおえて帰郷開業した。その一門は各地に分立して発展し、それぞれ門人を養成し、また藩医となるものも多かった。

静岡県の医学史については既に土屋重朗氏の名著『静岡県の医史と医家伝』<sup>(四)</sup>がある。蘭方医学を学んだ人々の家系や伝記は同書に詳しいので、ここではただその師承の明らかなもののみをみることによって、静岡県の蘭方医学の普及の流れを考察してみたいと思う。

## 一、カスペル流の人々

静岡県のカスペル流の医学には河口良庵の系統と伊良子系の二つがある。慶安二年(一六四九)来日の蘭医カスペルに学んだ河口良庵は、長崎から京都に移って門人を育てたが、その二男景友(のち宮崎元仲)は元禄年間に伊豆田方郡中村(葦山)に移り医業を行った。<sup>(五)</sup>宮崎家蔵の『加須波留伝来記』によれば、河口良庵が延宝五年三月に書いた「紅毛外治伝二帖」を、宮崎元仲が享保五年(一七二〇)に繕写して子と孫とに伝授しているので、河口良庵系のカスペル流は

宮崎元仲（景友）（河口良庵二男）

宮崎宗庵（順友または順立）（元仲の子）

宮崎仁庵（桃居）（宗庵の子）

有賀定達（権左衛門）（宗庵の子）

らへと伝えられている。このうち宮崎仁庵は大須賀鬼卵の書いた『東海道人物志』（享和三年）には詩書にもすぐれた儒医となつてゐる。また有賀定達は駿州下土狩村の世医有賀家をついでゐる。

一方京都にカスバル流を開いた伊良子道牛には、享保七年に遠州浜松の

三好節斎（菖軒）（もと小曾源蔵）

が学んでゐる。明和四年に『外科訓蒙図彙』を刊行した道牛の孫の伊良子光顕の母は、この三好菖軒の娘である。また菖軒の嫡子の

小曾源蔵（光猛）

も寛延四年に伊良子氏に学んでゐる。三好菖軒はのちに浜松藩医となり、その門人に

高部玄晏（敷智郡白洲村）（浜松市）

がある。江戸から新居関所の奉行松平主馬助の侍医として帰郷した村尾了庵の孫で、高部姓に復して医業を行った。

なおまた、師承は未詳であるが、相良に

桜井尚友軒（清季）

があり、宝暦三年（一七五三）榛原郡徳村の

久保小平太

にカスバル流外科を伝授しており、その神文誓紙が現存してゐる。<sup>(七)</sup>

## 一、長崎通詞系の医学

『紅夷外科宗伝』を書いた榎林鎮山に

本間惣兵衛清定（池新田）（小笠郡浜岡町）

が学んで帰り、医業を開いた。その門人の

本間春城（平田上平川）（小笠郡小笠町）

は享保十六年（一七三二）に開業し、その一族から多くの医家が出て各地に分立した。<sup>(八)</sup>

一方榎林鎮山の弟栄休の系の二代栄哲には

高部魯庵（敷智郡）（浜松市）

が学んでいる。前出の伊良子系の三好菖軒に学んだ高部玄晏の孫である。

さらに三代栄哲の子の榎林栄達には

市川魯庵（駿州小諏訪）（沼津市）

が学んでいる。小諏訪は小田原藩領のため、彼は小田原藩医となっている。

また吉雄耕牛には

塩津古桂（興津）（清水市）

がいたが、彼は吉益東洞に古医方を学んでおり、名医の名が高かった。古桂の孫の

塩津玄桂（直徹）（華岡青洲門人）

は吉雄耕牛の子の吉雄権之助に師事している。

なお、もと長崎通詞の和田平右衛門の子の

笹山道益（榮充）

は寛政元年（一七八九）田中藩医となり、その子の道益（道甫）も、その弟の可則も共に長崎に遊学しているが、その師は未詳である。

田中寿安（有渡郡今泉）（清水市）

も長崎に遊学し、紀州藩医となっており、

深沢雄甫（兼文）（沼津）

は寛政年間に長崎に学んで帰り、文化元年沼津藩医となるなど、長崎に学んだ人々が知られているが、その師承はいずれも未詳である。

### 三、荻野元凱の門人たち<sup>(九)</sup>

長崎に学んだ漢蘭折衷派の荻野元凱には、天明年間に入門者がみられている。即ち

山崎杏仙（子道）（掛川）

本間春伯（大器）（掛川）

本間兎毛（清静）（城東郡）（小笠郡）

丸尾良益（東海）（城東郡）（小笠郡）

らの人々で、後者二人は同時入門である。本間春伯は前出の楢林系の本間春城の養子で、長崎へ遊学して安永七年帰郷して一旦開業したあと元凱を訪ねている。本間兎毛は春城の実子で、一緒に入門した丸尾良益は寛政二年まで学んで帰郷し、更にそのあと寛政七年から十二年まで長崎に遊んでいる。

寛政年間になると

伊達仁藏（富士郡神谷村）

山崎文恵（掛川）（前出杏仙の弟）

山下立節（遠州中泉）（磐田市）

川田文格（城東郡平川村）（小笠郡）

渡辺友益（浜松）

伊吹宇庵（島田）

野中良育（榛原郡下吉田）

岡本大索（島田）

山崎龍沢（掛川藩医）

本間春育（掛川）

の人々が入門した。初めて駿河からの遊学があり、また藩医の入門もあった。川田文格は吉益南涯に古医方を学んだが、種痘に関心が強く、その孫の川田鴻育は嘉永二年牛痘法による種痘を行っている。

また享和、文化年間には

奥田元龍（田中）（藤枝市）

本間中郎（掛川藩医）

島津一斎（沼津）（吉益南涯門人）

伊達養敬（富士郡神谷村）

上田泰順（浜松藩医）

などがあり、掛川の本間家は藩医となっている。以上のように荻野元凱への入門者は縁故者や同郷のものに紹介される例

が多く、これは元凱没後（文化三年没）の門人録をみても同様である。

#### 四、華岡青洲に学んだ人々<sup>(一〇)</sup>

華岡青洲の外科の師は伊良子門の大和見水の養子で駿河出身の見立というが、見立については未詳である。青洲へは早く寛政十年に

遠藤丹二（富士郡大宮）（富士宮市）

が入門している。麻酔手術実施のあとで高名の文化年間には

小出祐節（豊田郡阿寺村）（磐田郡）

戸塚奏輔（掛川）

が入門した。戸塚奏輔（柳齋）は戸塚静海の兄で、桂川甫周門人の十束井齋に学び、のち府中（静岡市）に医業を開いている。

文政年間になると

広瀬保恭（富士郡天間村）

高須玄察（敷智郡新居）（浜名郡）

高部俊庵（敷智郡入野村）（浜名郡）

足立才二（浜松）

木村文龍（浜松）

遠藤幾三（富士郡大宮）（富士宮市）

中村逸齋（志太郡岡部）

高須貫一（敷智郡新居）

甲田悌齋（三島）

の人々が入門した。足立才二は土生玄碩門人の内田乾限の兄であり、また才二の子の双松は竹内玄同に師事している。中村逸齋は前出戸塚柳齋の養子となった積齋の実父である。なお大坂華岡塾と青洲没後（天保六年）の門人に二十四人もの人々があるのも、青洲の評判が如何に高かったかを知らしめるものであるが、その出身地はやはり宿場町が多いようである。

## 五、杉田玄白の門人

安永三年（一七七四）杉田玄白による『解体新書』の上梓は日本医学史上画期的な事業であったが、以来次第に江戸に遊学する人々が増加した。杉田玄白には

村尾董寛（長上郡小松村）（浜北市）

が入門した。董寛は前出新居関所奉行の侍医として帰郷した村尾了庵の孫の董節（賀川玄悦に産科を、堀元厚、松岡玄達に医と本草を学んでいる）の子である。はじめ名古屋で吉益東洞門人の古方医河合秋山に学び、寛政二年（一七九〇）に江戸へ出て、杉田玄白に師事した。更に津輕藩医樋口道泉に産科を学んで帰り、浜松に医業を開き、のち浜松藩医となっている。なお、その子村尾元融は儒を以て知られている。

また杉田玄白門人に小田原藩医市川隆甫があり、その養子の

市川恭齋（駿州小諏訪）（沼津市）

はまもなく別家の市川魯庵（前出、檀林栄建門人）の養子となったが、その門人に

渡辺宗齋（御殿場）



があり、嘉永三年同地方の種痘に関与した。

杉田玄白の子の立卿には、門人に

青木右内（伊豆）

深沢雄甫（文温）（沼津）

らがあり、深沢雄甫は前出の長崎遊学の兼文の子で、立卿の没後長崎と大坂に遊学し、緒方洪庵の適塾に入門している。

## 六、大槻玄沢の門人たち<sup>(二三)</sup>

杉田玄白門人の大槻玄沢には

竹嶋宗甫（駿州志田郡大嶋村）

青島玄台（駿州田中）（藤枝市）

の二人が学んでいる。竹嶋宗甫は吉田長淑の門人でもあり、田原茂斎の『賀延雲集録』（天保初年）には、「医術、悉曇韻学、称宗甫、俳諧号蘭斎、武嶋寛」と記されている。のち府中（静岡市）へ移り医業を開いたが、門人

小川真斎（府中）（静岡市）

は府中の名医といわれた小川清斎の父で、師と同じ吉田長淑門人の衣関順庵からも眼科を学んでいる。

なお、享和二年玄沢と共に長崎屋に蘭人を訪問した杉浦玄徳の門人には

瀬戸玄博（御殿場）

があり、その孫の隆斎（のち菊池廷介）は坪井信良と杉田玄端の門人である。

七、桂川甫周に学んだ人々

桂川甫周に学んだ事が確実な人々には

十束井斎（掛川藩医）

武井周朔（浜松藩医）

中田周賢（浜松藩医）

吉田長淑（江戸）（のち掛川藩医）

の人々がある。十束井斎は掛川藩士西川昌通の次子で、寛政七年（一七九五）藩医十束隆賢（戸塚静海の伯父）の養嗣となつた。若く桂川甫周に学び、一時掛川に閉居したが、のち再び江戸で馬場佐十郎に学んだといわれている。享和二年掛川藩に招かれた松崎慊堂に漢学を学び、慊堂の門人塩谷宕陰に娘を嫁がせている。井斎の門人には一族の人々、特に

戸塚静海（掛川）

などがある。静海は宇田川玄真門人でもある。

武井周朔は吉田長淑にも師事したが、『江戸今世医家人名録初編』（文政二年刊）や『魚鑑』（天保二年刊）などの著書があり、外科や本草に名があったようである。

吉田長淑はわが国最初の蘭方内科医として有名であるが、長淑は幕府の御先手同心馬場兵右衛門の三男で、母方の祖父吉田長肅の養子となり、桂川甫周に蘭学を学んでいる。のち宇田川玄隨の『西説内科撰要』をみて発憤し、蘭方内科医を志したが、何故か享和二年（一八〇二）九月大野甫察の弟佐公として義兄の宇田川玄真方へ寄寓し、さらに同年十月掛川藩医倉持宗寿の養子となっている。

吉田長淑が「倉持成徳直心」と称した時代の訳書は多く、平野満氏によれば、<sup>(一五)</sup>『泰西五診精要』五卷、『増補海上備用』

五卷、『撥古福鳥多』一冊、『遠西薬圃綱目』十七卷などがあり、また『神物知新』は焰硝製造法で文化五年五月藩侯に献上している。一方、宗田一氏の御示教によれば、文化五年秋大槻玄沢の『西洋鯨品訳説附言』には「……今夏既ニ同社倉持氏ニ託シテコレヲ訳セシム、稿成テ余ニ示ス。又取テ之ヲ読ニ間々誤解アリ、余カ心ニ満ス、コレ彼レ宿疾アリ、病間強テ起草スルカ故ナリト知ル、」とあり、当時病弱であつたようである。

舟木茂夫氏の御好意による掛川藩の「御家中家譜抜書、三」によれば、長淑は享和三年八月五日養父の家督をついで二十人扶持の藩医となつてゐるが、文化七年（一八一〇）三月五日願により隠居となつてゐる。しかしこの間養父の倉持宗寿は隠居して家督を譲つた後も引きつづき藩医の仕事を行い、文化六年十二月三日に死去しているので、この養父の死によつて長淑は再び吉田姓に復したものと思われるが未詳である。

## 八、吉田長淑の門人<sup>二六</sup>

吉田長淑には門人録が二種知られており、「門人籍」の方には

程田玄悦（沼津侍医）

武嶋宗甫（駿河村医）

十束隆圭（掛川侯臣）

谷口太仲（横須賀侯医）

武井周朔（浜松侯臣）

中田周賢（浜松侯臣）

があり、「門人譜、文政四龍次辛巳」には

鈴木春沢（駿州沼津逸士）

の記載がみられる。

程田玄悦は代々沼津藩医の家に生まれ、文政九年家督五十五石をついだが、文政十一年八王子の秋山義方（フリーヘランド 濟生三方の蘭文翻刻をした義方の父）が入門している。

武嶋宗甫は前出の大槻玄沢の門人である。

十束隆圭は前出の桂川甫周門人の十束井斎の養嗣子甫拍の子に隆圭があるが、その隆圭は天保十年生れのため別人である。長淑門人の武井周朔も中田周賢も共に甫周の門人であるから、この十束隆圭は恐らく十束井斎であろうと思われるがまだ確証はない。文化六年（一八〇九）桂川甫周の没後は、甫周の門人は多く吉田長淑の蘭馨堂へ移ったようである。

なお、長淑門人の平田篤胤は文化八年府中（静岡市）へ来て国学を講じており、また衣関順庵は同門の武嶋宗甫を府中に訪ねて前出の

小川真斎（府中）（小川劍三郎の祖父）  
に眼科を教えている。

以上のように桂川甫周、吉田長淑の門人には藩医が多くみられ、文化文政ごろになると少くとも江戸屋敷には蘭方医の需要があつたことがうかがわれる。

## 九、橋本宗吉、小石元瑞、新宮涼庭

江戸の蘭学が前野良沢、杉田玄白、柱川甫周あるいは大槻玄沢から次の世代の吉田長淑や宇田川玄真などに移つたように、関西でも新しい時代を迎えていた。橋本宗吉、小石元瑞、新宮涼庭や小森桃塙などに学ぶ人々があつた。

大槻玄沢門人の橋本宗吉には文政七ごろ

花野井有年（府中）（静岡市）

が学んでいる。有年は文政二年江戸で蘭学を学び、ハルマ辞書を写したといわれており、さらに文政五年にも江戸へ遊学して翌六年府中に医業を開いたが、文政七年京都に上り藤林普山に蘭語学を、さらに大坂に移り橋本宗吉に師事して蘭医学を学んでいる。文政八年帰郷し、『西学便覧』四十八巻、『西学医断』一卷、『診候精要』五巻、『内景一覽』一冊など多数の書を著したが、天保七年（一八三六）代用薬の研究中その無力を知って突然和方へ転じている。和方医としての著書も多数あったというが、現存の『医方正伝』（嘉永四年）をみても文中に医範提綱、遠西熱病論、紅毛本草、西医原病略、名物考遺補、漫遊雜記などの引用書を記しており、その学識がうかがえるようである。

同じく大槻玄沢門人の小石元瑞には

山崎龍洌（掛川藩医）

賀古公斎（浜松）

らが学んでいる。山崎龍洌（清方）は前出の荻野元凱門人の掛川藩医山崎龍沢（情興）（寛政十一年入門）の子で、龍洌も文政七年荻野氏に学んでいる。

賀古公斎は吉益南涯門人の古方医の父公山の親友の篠崎小竹のすすめで元瑞に学んでおり、のち江戸へ出て坪井信道に学び、浜松に医業を開いている。

新宮涼庭は文化七年長崎遊学の途次大坂で橋本宗吉、野呂天然を訪ね、この二人から蘭方につき大きな影響をうけている。この新宮涼庭には

長尾隆玄（信之）（遠江）

長尾元鳳（宗之）（遠江）

らが学んでいる。出身地がわからないのでその伝記も未詳であるが、文政五年刊の『窮理外科則』第三篇の輯録者は門人三名で、安芸の日高涼台と相模の市川隆甫（土唾）と遠江の長尾隆玄とである。また天保七年刊の『窮理外科則』第二篇

の輯録者は、丹後の新宮顕藏と遠江の長尾元鳳である。さらに天保八年刊と思われる『鬼国山人西遊日記』の校定者は加賀の黒川元良と遠江の長尾元鳳とである。

なお、大坂で新宮涼庭に蘭方を説いたもう一人の野呂天然の門人には

杉山帰一（駿州吉原）（富士市）

がある。杉山帰一は寛政十年江戸に生まれ、若くして野呂天然に師事したという。文政六、七年ごろ長崎へ遊学し、シーボルトにも学んだといわれている。文政十二年長崎からの帰途再び野呂天然に師事し、天保七年吉原へ帰っている。

一方、前野良沢門人の江馬蘭齋に学んだ小森桃塙には

川口玄良（元信）（沼津）

が師事している。

## 十、シーボルトをめぐる人々

文政六年（一八二三）来日したシーボルトは蘭方医学を学ぶ人々に大きな影響を与えたが、その門人に

戸塚静海（掛川）

がある。戸塚静海は寛政十一年掛川の医戸塚隆珀の三男に生まれ、文化十三年江戸へ出て十束井齋に学び、文政三年宇田川玄真へ入門した。さらに文政七年長崎のシーボルトに師事して、天保二年江戸へ帰り、種痘所、西洋医学所、薩摩藩医などを経て幕府奥医師となっている。なお、天保二年帰国の際には府中で兄の戸塚柳齋宅に泊り、前出の武嶋宗甫や花野井有年らと交友を深めている。

シーボルト事件に連坐した幕府奥医師土生玄碩の門人<sup>(二二)</sup>には

片山卜仙（周智郡秋葉山）

野中雲庵（府中）（静岡市）

福井自然（府中）（静岡市）

足立貞二（浜松）（のち内田乾隈）

高橋立徳（駿州江尻）（清水市）

高橋環（駿州江尻）（清水市）

らの人々がある。片山卜仙はもと小浜藩医で秋葉山に移り医業を開いた。片山国嘉の四代の祖である。野中雲庵（南溟）は『東海道人物志』に「儒学、詩文、古医方」として挙げられている。また足立貞二は前出の華岡青洲門人足立才二の弟で、安政のコレラの際には浜松藩にその対策を献策している。

またシーボルト門人湊長安は吉田長淑にも学んだが、湊長安の門人には

藤野長民（伊豆仁科）（賀茂郡）

がある。代々紀州淡島の神官で、藤野永易のとき仁科へ移った。藤野長民は文政八年湊長安に学び、のち新潟の柏崎の海津祐真、ついで出雲崎の小玉祐宜（良寛の分家という）へ寄寓し、この小玉祐宜の二女と結婚後に伊豆仁科へ帰り、医業を開いている。また二男の

藤野永昆（隆輔）

は大槻俊齋に学んでいる。このため藤野長民は後に俊齋から牛痘苗を得て種痘を行っている。

なおまたシーボルト門人の竹内玄同には

足立双松（浜松）

が入門している。前出の華岡青洲門人足立才二の子で、のち浜松藩医となっている。

さらにシーボルトに学んだといわれている

柴田方庵（掛川藩医）

は、掛川藩医柴田脩石の弟で、嘉永五年五月二十人扶持の掛川藩医となっている。方庵は嘉永二年長崎でモーニッケの種痘に立会い、その分苗に尽力している。

## 十一、伊東玄朴の門人<sup>(二四)</sup>

シーボルト門人で江戸に象先堂を開いた伊東玄朴の門人には、天保年間に

松下良斎（駿州吉原）（富士市）

村尾多門（浜松）

らがあり、村尾多門は前出の杉田玄白門人の村尾董覚の二男である。

弘化、嘉永になると

莊田隆民（伊豆土肥村）（田方郡）

西田元貞（富士郡）

戸塚玄斎（府中）（静岡市）

天野玄同（駿州藤枝）

北島三益（遠州袋井）

肥田浜五郎（豆州韮山）（田方郡）

らの人々が学んでいる。莊田隆民は文政の末に長崎に遊学しており、のち原家をついでいる。戸塚玄斎<sup>(二五)</sup>は前出の吉雄権之助門人の塩津玄桂の子で、戸塚静海に学んでいる。府中の戸塚柳斎の養子となったが、のち興津へ帰って塩津家の医業をついでいる。



肥田浜五郎は川本幸民に学んだあと玄朴へ入門し、近代日本造船の先駆者となったが、その父の春安は医師で前野良沢に学んだともいわれている。倉成龍渚の塾で坪井信道と共に儒学を学んだ春安は、嘉永三年伊東玄朴から分苗を得て種痘を行っている。

安政年間以降では

原 玄誠（駿州大平村）（沼津市）

望月玄岱（駿州岩瀬村）（庵原郡）

安達尚徳（伊豆三島）

植松元貞（駿州岡宮）

らの人々が伊東玄朴に学んでいる。

## 十二、坪井信道と川本幸民

宇田川玄真の門人には前出の戸塚静海や、坪井信道、緒方洪庵などがあるが、坪井信道の門人には

石井習斎（豆州田方郡北条）

中西謙堂（駿州富士郡大宮）（富士宮市）

邨松良綏（府中江川町）（静岡市）

市川薦斎（駿州小諏訪）（沼津市）

寺尾東達（豆州三島）

賀古公斎（浜松）

らが知られている。中西謙堂は大宮の代々の医家中西道仵の子で、中西亀太郎の養父である。邨松良綏は村松良肅（晩村）

と思われ、のち府中の名医といわれている。

坪井信道門人の川本幸民は、吉田長淑門下の足立長雋に学んだが、川本幸民の門人<sup>(二七)</sup>には  
浅岡杏庵(高卿)(伊豆下田)

岩崎良叔(掛川)

久能堅治(宗改)(横須賀藩医)

常盤応斎(横須賀藩医)

戸塚隆庵(三折)(掛川藩医)

戸塚悔庵(柳溪)(府中)

白松恭平(掛川)

塩津玄哉(駿州興津)(清水市)

関 俊貞(駿州富士郡大坪村)

田島柳卿(府中札ノ辻)(静岡市)

などの人々があり、出身地もひろがっている。塩津玄哉は前出の伊東玄朴門人の戸塚玄斎である。

### 十三、緒方洪庵と広瀬元恭

坪井信道門人の緒方洪庵と広瀬元恭は夫々大坂と京都に塾を開いたが、静岡県からの入門者も多かった。

緒方洪庵の適塾<sup>(二八)</sup>へは、弘化、嘉永年間に

深沢雄甫(東駿沼津)

柳下立達(東駿沼津)

戸塚柳溪（駿州府中）

肥田 貢（豆州東浦八幡野）（田方郡）

野村震平（遠州横須賀藩）

篠田秀道（駿州富士郡上野）

本間恒哉（遠州掛川）

などの人々が学んでいる。深沢雄甫は前出の杉田立卿の門人である。柳下立達は洪庵の友人の沼津藩医柳下惠斎の弟で、  
広瀬元恭に学んでいる。戸塚柳溪は前出の川本幸民の門人である。

さらに安政年間以降になると、

跡見玄山（遠州浜名郡自須賀）

伊吹静馬（駿州藤枝）

神谷健輔（駿州素我）

深沢文卿（駿州藤枝）

宮崎尚温（掛川藩）

秋元明司（遠州掛塚）（磐田郡）

足立藤三郎（遠州袋井）

らが入門している。跡見玄山は華岡氏にも学んでいる。足立藤三郎はのちの陸軍軍医監の足立寛である。

一方京都の広瀬元恭（二九）には

柳下立達（駿州沼津）

飛弾良歳（伊豆松崎）

大竹良輔（遠州袋井在山梨）

柳下恵篤（駿州沼津）

神谷準助（駿州藤枝）

などの人々が学んでいる。

#### 十四、種痘に尽力した人々

以上静岡県 of 蘭方医学を学んだ人々とその師家の学統をみてきたが、東西に長い静岡県の地理的な事情と、東海道の宿場を中心に東西の文化の交流がなされていたことなどから、その師家は江戸や京都大坂或いは長崎と特に集約されずに分散されていることが判明した。このことが象徴的にあらわれたのが静岡県における種痘である。

坪井信道の門人で種痘で有名な桑田立齋に

浜野月齋<sup>(三〇)</sup>（豆州加茂郡和田村）

が入門したのは、嘉永三年（一八五〇）三月であった。

静岡県で最も早い種痘は伊豆韮山の代官江川太郎左衛門の命により、嘉永三年二月肥田春安が伊東玄朴から痘苗を得て行っている。ところが同じ伊豆の浜野月齋は一カ月後に江戸へ出て立齋に種痘術を学び、三カ月のちに帰国して種痘を行っている。一方仁科では藤野長民が、大槻俊齋から分苗をうけて種痘を行っている。

駿河では御殿場の渡辺宗俊またはその子宗齋が、嘉永三年六月に種痘を行っている。渡辺宗齋は小田原藩医市川恭齋の門人で、恭齋は楢林栄建に学んだ市川魯庵の養子である。

遠江では小笠原郡の川田鴻齋<sup>(三一)</sup>が早く嘉永三年に種痘を実施しているが、その痘苗は師の小田原藩医市川魯庵（顕之）が京都の楢林栄建から分苗を受けての帰途鴻齋に与えられたようである。また浜松では坪井信道門人の賀古公齋が、大坂の緒

方洪庵から分苗をうけて種痘を行っている。

このように静岡県の蘭方医学を学んだ人々は、自由にその師をえらんで遊学し、他門の人々とも広く交流を行ってその学識を深めていったようである。

終りに種々御教示を賜わった土屋重朗氏、舟木茂夫氏、宗田一氏、平野満氏に厚く御礼を申し上げます。

## 文 献

- (一) 塚本 学「医療をめぐるひとびとの交流―十八・九世紀駿遠地方における―」『静岡県史研究』四号、三〇頁、昭和六十三年。
- (二) 平賀源内『物類品隲』三三―三四頁、日本古典全集、昭和三年。
- (三) 司馬江漢『江漢西遊日記』一三―三〇頁、日本古典全集、昭和二年。
- (四) 土屋重朗『静岡県の医史と医家伝』戸田書店、清水市、昭和四十八年。
- (五) 川島恂二『土井藩歴代蘭医河口家と河口信任』五四―七五頁、近代文芸社、東京、平成元年。
- (六) 京都府医師会『京都の医学史、資料篇』二四―一頁、思文閣出版、京都、昭和五十五年。
- (七) 後藤一朗『今日の相良史話』一〇六―一〇七頁、相良町教育委員会、昭和五十年。
- (八) 『小笠医師会史』小笠医師会、昭和五十六年。
- (九) 前出(六)と同じ、三〇―三三頁。
- (一〇) 呉 秀三『華岡青洲先生及其外科』四五九―四六〇頁、思文閣(複製)、昭和四十六年。
- (一一) 岩崎鐵志「文化の興隆」『浜北市史通史』上巻、一二四―一二五頁、浜北市役所、平成元年。
- (一二) 渡辺竹雄『地方文人の生活と思想―渡辺家の医と寺小屋を中心に』創研出版、平成元年。
- (一三) 板沢武雄『日蘭文化交流史の研究』五一―五二頁、吉川弘文館、昭和三十四年。
- (一四) 舟木茂夫「掛川藩洋学者十束井齋伝」『いわちどり』八号、六一―三二頁、昭和五十五年。
- (一五) 平野 満「吉田長淑の養子関係と宇田川玄真」『日本医史学雑誌』三六巻二号、一三三―一三八頁、平成二年。

- (一六) 吉川芳秋『蘭医学郷土文化史考』一五—二五頁、昭和三十五年。
- (一七) 前出(四)と同じ、一一三—一二六頁。
- (一八) 額田 焜「賀古鶴所」『日本医事新報』三四四—一號、五九—六一頁、平成二年。
- (一九) 山本四郎『新宮涼庭伝』ミネルヴァ書房、京都、昭和四十三年。
- (二〇) 前出(四)と同じ、一九八—二〇六頁。
- (二一) 舟木茂夫「小笠医家伝(二)、静海生家戸塚家のすべて」『いわちどり』六号、一九一—六四頁、昭和五十三年。
- (二二) 『土生玄碩先生第五十年記念会贈位祝典記事』一—四頁、大正五年。
- (二三) 藤野 順『代々村医者百五十年』青弓社、昭和五十八年。
- (二四) 伊東 栄『伊東玄朴伝』一〇五—一一四頁、八潮書店(復刻)昭和五十三年。
- (二五) 土屋重朗「興津の医史」『清水郷土史研究会誌、清見瀉』創刊号、平成三年。
- (二六) 青木一郎『坪井信道詩文及書翰集』三三一—三三四頁、岐阜県医師会、昭和五十年。
- (二七) 川本裕司、中谷一正『近世日本の化学の始祖川本幸民伝』二四—二五九頁、共立出版、昭和四十六年。
- (二八) 緒方富雄『緒方洪庵伝』(第二版)一八八—三〇二頁、岩波書店、昭和三十八年。
- (二九) 前出(六)と同じ、三九九—四一二頁。
- (三〇) 島田千秋「浜野月斎—その売薬と種痘」『伊東覚え書』、昭和五十五年。
- (三一) 舟木茂夫「小笠種痘誌(統編)」『いわちどり』十一号、昭和五十八年。

(J R 東海、静岡鉄道健診センター)

# A short history of Dutch medical learning in Shizuoka Prefecture in the Edo Period

by Shinzo TSUDA

During the Edo Period, a powerful feudal lord did not exist in Shizuoka Prefecture. In place of an influential lord, the highway "Tōkaido" controlled the district culture.

Famous doctors frequently came and stayed of inns or stopped at their friends' houses.

They were good friends with the general practioners and related much news of medicine to the sons of practioners.

The sons went to Edo, Kyoto or Nagasaki and studied Dutch medicine. Their selection of masters was quite free.

They put their heart into medicine. After studying, most of them returned to their homes.